豊かな水を求めて

みめうるわしい女人の園にうまし酒はつきものであるが　その仲をとりもつものは　これはまた　うるわしくあまい水というのが　古来のしきたりであった．　そしてその仲をとりもつ水は　深い関心をもたれずに黙々と奉仕させられていたのである．　水が資源だという感覚からは　ほど遠い状態で‥‥．

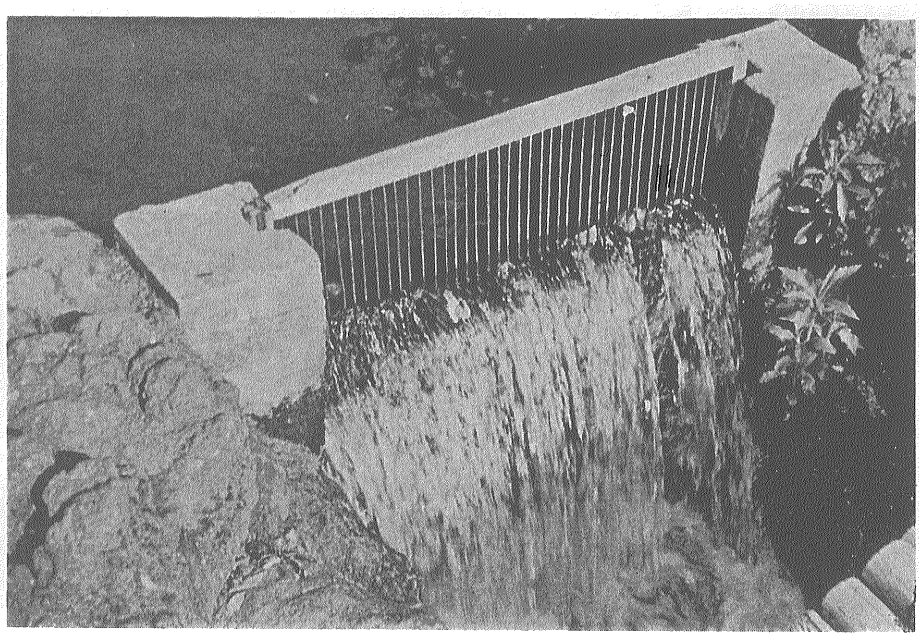
ところが水の需要が急激に増加してくると　自らそこに必要な需給の均こうが　そこなわれてしまう．　そこで私たちは改めて水の価値を知り　その存在をたしかめ合う．　そして最初は低い経済性からであるが　次第にこれをたかめながら　いかにして効率よく水をえるかということを　にわか仕込みで研究しだす．　いまやこうした私たちの研究は　いろいろとはじめられているのであるが　そのほんとうの結実をみるまでには　なお幾多の迂余曲折が必要であろう．　とまれ　水は漸くにして資源の座にすわり込んだかに思われる．

☆　☆　☆

幸か不幸かわが国では国内至るところで水にめぐまれていた．　四周に海をめぐらし　そこから吹きよせる湿風は　四つの島をこしらえている数多くの火山　山岳に打当って　年平均1,600㎜という多雨な気象条件をおりなしている．　したがって　国内多くの場所で　わき水あり　せせらぎあり　井戸は浅くして飲むに十分な量の水を貯えている．　水田農業が自然発生的に　湧水する水　流れでる水をとり込んで　我田引水の歴史を書きはじめるに何のちゆうちょもいらなかったであろう．

しかしそのために　先住の民は水の経済性や水を計画的にえることを知らずに過ごしてきてしまったし　利水の面で　水田灌漑がとびはなれて優先するという現状を招いたというわけでもあろう．

☆　☆　☆



湧　　泉

こうして　慣行水利権が折角の水の利用を制約するという結果を生むに至ったのであるが　はじめのうちは直接水利権の対象にならない地下水や　そのほかの水源になお水道や新興産業である工業などの用水のえられる余ゆうが残されていた.

しかし　工業の発展はめざましく　たくましく　驚異的であって　しかも都会地や海岸埋立地などに密集して発達したため　水田にとられて残り少なくなった河川の水はすでに取りにくく　あまつさえ海側からは塩水のそ上が激しく　とりわけ夏の渇水期には水に泣かされるというわけである.

限られた広さの土地から限られた水量しかえられない地下水も　集中利用のため　いきおいむりやりにしぼりとられるはめにおちいらざるをえなくなってしまう.

井戸のらん掘　干渉競合　異常な水位低下　そして地盤沈下と塩水混入.　しかも　それにもまして用水型工場に都合のわるいことは　揚水量の減少.

かくて水利用の面で最悪の事態がやってきた.

☆　☆　☆

1956年工業用水法の国会通過により　井戸の新設分の規制によって　地下水の合理的利用をはかるいとぐちが講じられる一方　代替として公営の工業用水道が　工場給水の一端を荷なうこととなった.　次いで　工業用水道事業法の成立によって　工業用水道建設事業は法律的バックのもとに軌道にのり　地盤沈下地帯　用水不足地帯の救急薬として大幅な業績をあげるのみならず　全国数百の市町に企業誘致の前提としての工業用水道ブームをこしらえるに至ったのである.

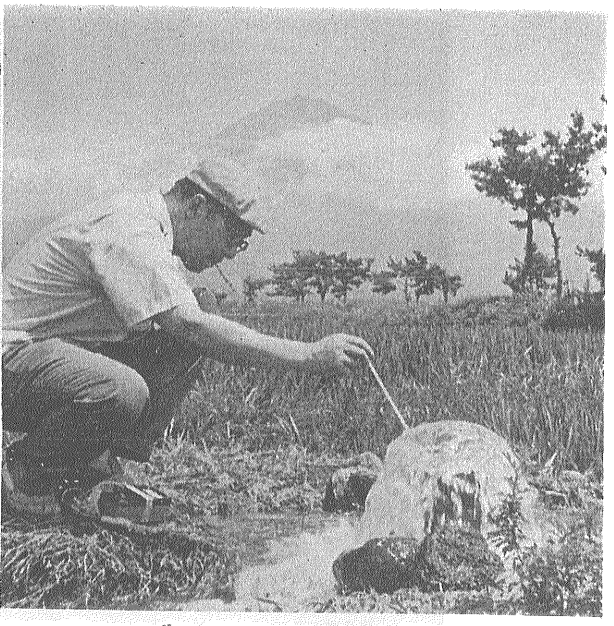
☆　☆　☆

もともと企業誘致のブームは　ここ4，5年来全国を風びし　多くの農地が工業用地に転換されるとともに太平洋岸の都府県は海面埋立におおわらわとなっている.

ある都市では土地　水の準備ばんたんを整えているのにめざす工場はこないが　別の都市では呼びもしないのに40～50の企業がのりこんでくるし　千葉県のように水の手当と無関係に多数の大規模用水型工場が入ってくるなど　さまざまの企業誘致絵模様をくりひろげている.

しかし企業も工場用地の選定にあたっては　このところひどく水に熱心であり　とくに用水型工業の場合には他の立地因子　たとえば　港湾・電力・道路・労務など

自　噴　井



岳ろくの自噴井

の諸条件に優先して　用水適地に指向される傾向が強くなってきた．　工場立地調査法などの施行を通じて国の立地政策が　工場の立地の適正化を呼びかけ　一方多くの水資源地域調査の成果の蓄積が利用されることが　それに拍車をかけることになったのであるが　企業の水を求める欲求は次第に熱を帯び　真剣なものになってきたのである．

しかし地価の投機的昂騰はあれよあれよという間に坪500円の土地を2,000円とし　5,000円にあげ　水の条件に優先する力を示したがために　しばしば企業は折角の判断を最後の土地の入手という点で譲歩してしまい　近くにまできていながら水のでにくい　地価の安い一角に用地を選定するという例が少なくない．

☆　☆　☆

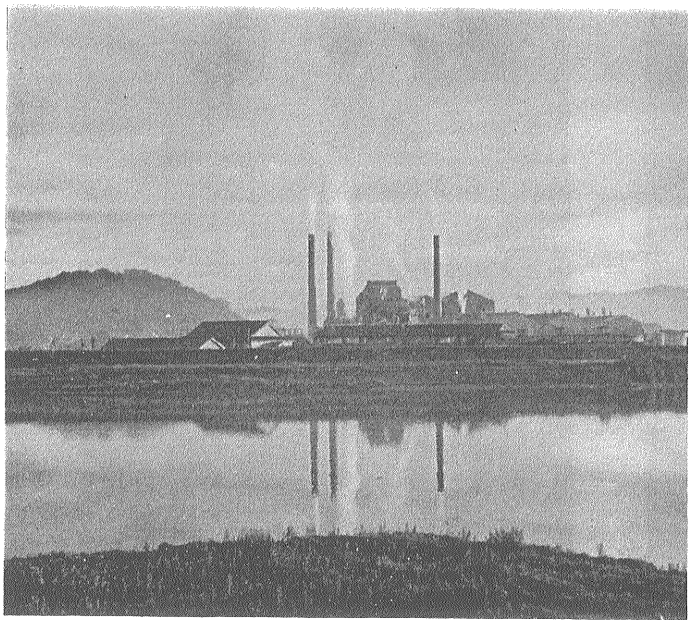
いくつかの大きな化学繊維工場は低温・清澄な地下水を求めて絶好の用水適地を捜しだし　化学工場は将来の用水増加に対処して　工場構外の取水適地に水源を求めるようになった．　水の調査結果が年ごとに重視されるに至り　同時に地方自治体のお座なりの企業誘致資料では　満足しないという段階になってきている．

こうして多くの企業はその将来の増設・拡大に対する投資のために　自らの手で資料をあつめ　試験し　用水適地に向かっての進出を試みている．　幸い工業用水道事業も　1年1年事業費の増加をみており　めざましい伸びを示している．　そしていまや工業都市の必要にして十分な条件の1つに数えられるに至った．　多くの都市がそれを計画し　めじろおしに　その事業の起債認可をまっているのである．

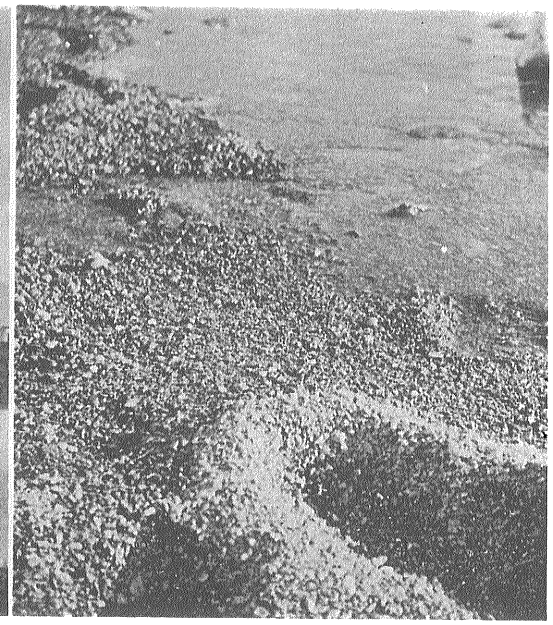
☆　☆　☆

いまや工業の異常な発展のうずのさだ中にあって　企業界は豊かな水を求めて東奔西走　用水適地の物色に余念がない　そして少しでも進歩的な経営者は将来の水の心配のないところに工場をと　熱心に心を動かしはじめている．

たとえ全たく内部からの自主的な関心から動きだしたのでないにせよ　水の資源的価値はどうやら工業用水によってはじめて確立される気配さえみられる．　この時に当たって　この方面の第2の発展段階へのいとぐちとして　この工業用水特集号が適切に評価されるならば　編者一同望外のよろこびである．



河畔の工場立地



河床下に浸透する表流